「臼木栄信の頌徳碑」について

整理番号	題額	題額揮毫	碑記撰文	碑記揮毫
浦和一一	臼木先生之碑	中村九十郎	中村九十郎	中村九十郎

鐫刻	撰文建碑年	住所	場所	備考
—	一九〇五・明治三八	緑区三室	さいたま市立浦和博物館	

一．はじめに

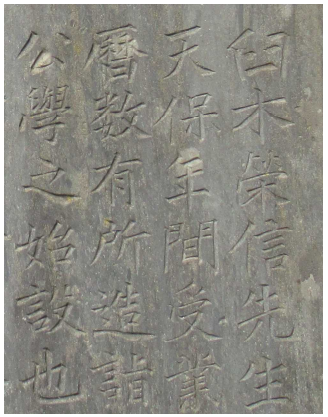
本石碑は、幕末から明治期にかけて、旧浦和市南元宿で手習い教師として多くの子弟を育てた臼木栄信の頌徳碑（筆塚の碑）である。

昭和期に作成された「埼玉県教育史金石文集」や「浦和の石ぶみ」には、南元宿の臼木家旧邸にある、とあるが、現在は、さいたま市立浦和博物館の前庭に立つ。

○写真１　石碑正面

○写真２　篆額

○写真３　「碑記」部分



二．翻刻及び訳注

■翻刻

◎題額（篆書体）

臼木
先生
之碑

◎碑記（楷書体）

臼木榮信先生埼玉縣北足立郡人文政九年十二月十五日生於仝郡南元宿村幼頴悟天保年間受業於同郡吉岡仁齋又隨稲垣正雄學劒講軍學傍遊正野正定之門究天文曆数有所造詣云弟子數百人諄諄教而不倦十有餘年終始如一日以至明治六季仝年公學之始設也擧門弟皆託焉當時子弟惜別猶赤子於慈母云先生之德可知也後為村吏盡力於公益者不尠晩年窺佛典有信心堅固者矣今歳重齡八十尚鑊鑠有凌壯者之概先生之長壽豈知非其樂天命而不疑哉頃日門弟等胥謀将建碑以傳先生之偉德嘱余文於戲先生博學篤行衆仰以為郷先生先生之偉德豈不傳而可乎哉銘曰

學之深兮　教人諄諄　德之高兮　導民敦厚　儒與佛兮　知天樂命
文與武兮　一郷景仰

明治三十八歳次乙巳二月廿五日　元埼玉縣北葛飾郡彦成　中村九十郎謹撰並書
尋常高等小學校訓導兼校長

●異体字など
○䣊　郡。　○哉　哉。　○兼　兼。　○钁　矍。

■訳注
●本文（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）
臼木榮信先生、埼玉縣北足立郡人。
文政九年十二月十五日、生於仝郡南元宿村。
幼顙悟。
天保年間、受業於同郡吉岡仁齋。
又隨稲垣正雄、學劔講軍學。
傍遊正野正定之門、究天文暦數。有所造詣云。
弟子數百人、諄諄教而不倦、十有餘年、終始如一日、以至明治六季。
仝年公學之始設也、擧門弟皆託焉。
當時子弟、惜別猶赤子於慈母云。
先生之德可知也。
後爲村吏、盡力於公益者不尠。
晩年窺佛典、有信心堅固者矣。
今歳重齡八十、尚矍鑠、有凌壯者之概。
先生之長壽、豈知非其樂天命而不疑哉。
頃日、門弟等胥謀、將建碑以傳先生之偉德、囑余文。
於戲、先生博學篤行、衆仰以爲鄕先生。
先生之偉德、豈不傳而可乎哉。
銘曰
　學之深兮　敎人諄諄。
　德之高兮　導民敦厚。
　儒與佛兮　知天樂命。
　文與武兮　一鄕景仰。
明治三十八歳次乙巳二月廿五日。
元埼玉縣北葛飾郡　彦成尋常高等小學校訓導兼校長、
中村九十郎謹撰並書。

●訓訳
臼木榮信先生は、埼玉縣北足立郡の人なり。
文政九年十二月十五日、同郡の南元宿村に生まる。
幼くして顙悟なり。
天保年間、業を同郡の吉岡仁齋に受く。
又た稲垣正雄に隨ひて、劔を學び軍學を講ぜらる。
傍ら正野正定の門に遊び、天文暦數を究む。造詣する所有りと云ふ。
弟子數百人、諄諄として教へて倦まざること、十有餘年。終始一日の如くして、以て明治六季に至る。
同年公學の始めて設けらるるや、門弟を擧げて皆な焉に託す。

當時の子弟、惜別すること猶ほ赤子の慈母におけるがごとしと云ふ。
先生の德、知るべし。
後村吏となり、力を公益に盡くすこと尠（すく）なからず。
晩年佛典を窺ひ、信心堅固なる者有り。
今歳齡を重ぬること八十にして、尚ほ矍鑠として、壯者を凌ぐの概有り。
先生の長壽は、豈に其の天命を樂しみて疑はざるに非ずを知らんや。
頃日、門弟等胥（とも）に謀り、將に碑を建てて以て先生の偉德を傳へんとし、余に文を囑す。
ああ、先生の博學篤行、衆仰ぎて以て鄕先生となすなり。
先生の偉德、豈に傳はらずして可ならんや。
銘に曰く、
　學は之れ深く　人を敎ふること諄諄たり。
　德は之れ高く　民を導くこと敦厚たり。
　儒と佛と　天を知り命を樂しむ。
　文と武と　一鄕景仰す。
明治三十八歳次乙巳二月廿五日。
元埼玉縣北葛飾郡、彦成（ひこなり）尋常高等小學校訓導兼校長、
中村九十郎謹みて撰し並びに書す。

●人物

○吉岡仁齋　吉岡範善のことだろう。範善は、寛政四（一七九二）年から慶応三（一八六七）年。足立郡道場村の生まれ。弱冠二十歳で江戸へ出て学業を受け、また医術と撃剣・柔術を学ぶ。文政年間、三十三歳で故鄕へ帰り、以後、農業のかたわら村童に句読と習字を教えること四十年であった。没後三十三回忌にあたる明治三十二（一八九九）年に、弟子達による頌德碑が作られたという（「吉岡範善の碑」より）。

○稲垣正雄　稲垣田龍のことだろう。田龍は、享保十七（一七三二）年から文化元（一八〇四）年。足立郡鈴谷村の旧家の生まれ。諱は玄節、字は仙松、田龍と号した。若い頃から武技をたしなみ、長じて江戸に出て、撃剣、柔術、さらには戸田流棒術や越後流兵法も学んだ。一方、平田篤胤から国学を、浅野北水翁から天文学を学んだ。のち故鄕の鈴谷に帰り、道場を開き、剣術の指導や学問の教授にあたり、門弟は数百人に及んだという。「埼玉県与野市文化財報告書第十一集　稲垣田龍調査報告」（一九八四）に彼の著述の詳細が記されている。

○正野正定　正野友三郎のことだろう。文化六（一八二三）年から明治二十四（一八九一）年。幕末・明治時代の和算家。円阿弥村の生まれ。号は定堅。大間木村の大熊溪雲に算学を習い、自らも算学塾を開設し、「算学大成内外編」「算法容術五十問答術」などの算学書を残した。日枝神社に奉納した算額は、現在与野鄕土資料館に収蔵されている。

○中村九十郎　明治期の教育者だが、詳細は不詳。埼玉県立文書館所蔵史料によれば、明治十五（一八八二）年に北足立郡第十四学区田島学校訓導に任用されたのを皮切りに、遊馬学校、川口学校、三室学校、木崎学校・木崎尋常小学校、土合尋常小学校の訓導をつとめ、同二十八（一八九五）年に土合尋常小学校訓導兼校長、同三十四（一九〇一）年八月に彦成尋常高等小学校訓導兼校長に任用されている（同三十五年十二月まで）。また富士見市立南畑小学校のウエブサイトの学校沿革に「南畑尋常高等小学校　明治四十三年四月　校長・中村九十郎　児童数四七二人」とあり、彦成小学校退任以後も教員を続けていたようである。

●注

○文政九年　西暦一八二六年。
○頴悟　才智が優れて賢い。
○天保年間　西暦一八三〇～一八四四年、
○暦數　暦法。
○造詣　学問が到達した境地。
○諄諄　丁寧に教えるさま。「詩経」大雅・抑「誨爾諄諄、聽我藐藐（私はあなたに丁寧に教えているのに、あなたは私の話をろくすっぽ聞きはしない）」。
○終始　はじめからおわりまで。
○公學之始設　明治五年学制が公布され、翌六年から小学校が設置された。
○村吏　おそらく村長であろう。
○矍鑠　年老いてなお、元気で丈夫なさま。
○天命　天から与えられた運命、寿命や禍福。
○郷先生　退官して故郷で後進の指導にあたる人。転じて田舎の先生。「おらが村の先生」くらいのイメージがあり、少なからず親しみが込められているようだ。
○一郷　村をあげて。
○景仰　慕い仰ぐ。
○明治三十八歳　西暦一九〇五年。
○訓導　教員。

●口語訳（章立てと小見出しは訳者が便宜的に施した）

【臼木栄信先生の経歴】

臼木榮信先生は、埼玉県北足立郡の人である。

文政九（一八二六）年十二月十五日、同郡の南元宿村に生まれた。

幼いころから才智が優れていて賢かった。

【師弟関係と学問】

天保年間に、同郡の吉岡仁齋から学業を授けられた。

また稲垣田龍について、剣術を学び、軍学も講学された。

そのかたわら、正野正三郎の門に遊び、天文暦法を考究したが、この分野でかなりの学問的レベルに達していたといわれる。

【教育者臼木先生】

（その後、教える側にまわり、手習い所における）数百人の弟子に対し、丁寧に教え諭すこと十年以上にわたり、決して倦むことはなかった。毎日同じように教え続け、明治六年まで至った。

【公学校の開設と子弟の移籍】

ちょうどこの年、新たに学制が定められて、公の学校が開設されると、手習い子をすべて学校へ託し（、自らの手習い所は閉所し）た。

当時の子弟たちは、まるで赤ん坊が慈母を慕うかのように、先生との別れを惜しんだ。

先生の教師としての徳の高さがおしはかられるだろう。

【村役人臼木先生】

そののちは、村の役人となり、公益に力をたいそう尽くした。

【仏教への傾倒と、先生の長寿】

晩年は、仏教に心を傾け、固い信仰を持った。

本年、臼木先生は八十の年を重ねられたが、いまなお、矍鑠として、若者をも凌ぐ気概の持ち主であられる。

先生の長寿の所以は、与えられた天命を楽しんで疑うことがないことにあるのではなかろうか。

【建碑の企画、石碑の意義】

さきごろ、門弟達がともに謀り、石碑を建てて、先生の偉徳を後々まで伝えたいとして、私に碑文を依頼してきた。

ああ、臼木先生の広い学問や篤実な行いについて、人々は「私達の村の先生」と仰ぎ見て親しみ尊敬したのであった。

先生のこうした偉徳は、これを後世に伝えなければならないだろう。

【銘】

銘に言う、

教育者として、学問は深く、弟子を教えるにあたっては、懇切丁寧。

公職者として、人徳は高く、人民を導くこと、実に手厚く。

儒学と仏教とを深く理解し、天命を知り、天命を楽しんだ。

その深い文化性と尚武の人柄を、村中のひとびとは慕い仰いだ。

【記録】

明治三十八年、乙巳の歳、二月二十五日、

元埼玉縣北葛飾郡彦成尋常高等小學校訓導兼校長である中村九十郎が、謹んで撰文し、また揮毫した。

三．主な参考資料

①翻刻

・埼玉県教育委員会『埼玉県教育史金石文集　上・下』（埼玉県教育委員会、一九六八）

・浦和市郷土文化会編『浦和の石ぶみ』（浦和市郷土文化会、一九八七）

②論文など

・小島熙『浦和の今昔物語』（草土社、一九六七）

以上

二〇二四年一月　薄井俊二訳す